

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720063

研究課題名(和文)変容するインド北東部の音楽祭と若者の文化的アイデンティティに関する音楽民族学研究

研究課題名(英文)An ethnomusicological study of the music festivals in Northeast-India

研究代表者

岡田 恵美 (OKADA, Emi)

琉球大学・教育学部・講師

研究者番号：60584216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：インド北東部ナガランド州における音楽祭は、州政府の音楽振興政策に起因し、音楽学習熱の高揚や音楽産業の萌芽を促し、文化的アイデンティティの収斂、コミュニティの結束・拡大においても媒介的な機能を担っている。音楽家の多くは、第一に西洋の教会音楽が彼らの音楽的基盤にあることに他インド地域との差異を見出し、第二に伝統的歌唱法をポピュラー音楽と融合させることで、新たな形での少数民族文化の再生に繋げている現象も見られる。若者に向けたポピュラー音楽振興政策や付随する音楽祭は、インド国内においても先駆的な事象で、若者文化の活性化、音楽産業の萌芽、対外的な新たなイメージ戦略と繋がっていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The music festivals in Nagaland State of Northeast-India near Indo-Myanmar border have been larger and occur the recent developments in the music industry, a contraction of cultural identities and solidify community identities of an ethnic minority. The most of musicians in Nagaland realize their music background of Western church music and often create fusion style music mixed western popular music with their musical origins and the traditional folk songs. This must connect with the historical context of the long struggle for Nagaland independence from India and the recent strategic policy for popular music and young musicians which is promoted by the Nagaland state government change musical scenes not only in Nagaland but also in Northeast-India.

研究分野：民族音楽学

キーワード：少数民族 音楽祭 文化政策 ナガ インド北東部

1. 研究開始当初の背景

インド北東部は、ブータンやミャンマーに近接し、異なる民族や言語による7州(図1)で構成されている。



図1 調査対象の2都市

2011年のインド国勢調査報告に依拠すれば、インド総人口約12億1,000万人の内、インド北東部7州の合計は約4,500万人であり、全体の3.7%に過ぎない。地理的にも、北東部はインド本土から離れ、インド・アリア系その他、モンゴロイド系の少数民族が密集する多民族・多言語地域である。1963年から北東部の州が段階的に再編成されて以降、各州ではインドからの分離独立を目指す独立闘争が激化し、軍や治安維持部隊との衝突が相次いだ。現在においても、ナガランド州のミャンマー国境地帯では、モンゴロイド系少数民族の集合体である「ナガ」の一部の武装集団が依然として闘争を続け、インド国内で過去10年間の人口が唯一減少している州が、ナガの居住地であるナガランド州である。その一方で、アッサム州は北東部の人口の約69.3%が暮らし、紅茶や石油産業で潤う。その中心地グワハティには他州からの移民が移入し、多様な民族で構成された'Northeast'という新たな文化圏が構築されつつある。

インド北東部の音楽文化の特徴は、筆者が2008年～2009年に実施したインド国内の楽器産業や楽器教育の研究からも、以下の点が浮き彫りになっている。

(1) 第一に、西洋音楽教育がインドの他地域よりも浸透している点である。インド国内で実施される英国のトリニティ・ギルドホール試験やABRSM試験(英国王立音楽検定)といった西洋音楽の検定試験の受験者数が他都市と比較して、多いことが指摘できる。

(2) 第二に、インドで市場拡大している日系楽器メーカーへの調査から、ギターやシンセサイザーといった輸入楽器の需要が非常に高いことも明らかである。北東部は、20世紀初頭、米系バプテスト宣教師の布教活動が勃興した地域であり、現在もヒンドゥー教徒と並んでキリスト教徒が多く、教会音楽が浸透していることも西洋音楽の普及と相関

性があると考えられる。

(3) 第三の特徴は、2000年代以降、アッサム州グワハティやナガランド州コヒマ(図1)を中心に、プログレッシブ・ロックやメタルといったジャンルの音楽集団が台頭している点である。ナガランド州は「インド・ロックの首都」とも言われ、北東部の音楽番組のチャートは、そうしたジャンルの音楽集団が毎回上位を占め、その人気は隣国や本土にも拡大しつつある。

インド本土のポピュラー音楽においては、今も昔も圧倒的にボリウwoodsの映画音楽が優勢であり、その他では、90年代より「インディーポップ」と呼ばれるインド音楽と西洋音楽を融合させたフュージョンのジャンルも興隆してきた。北東部においても、本土のポピュラー音楽や、アッサム映画音楽、各地域の民俗音楽等の需要はあるものの、90年代以降はケーブルTVの音楽チャンネルの普及に伴って、若年層を中心に、西洋のポピュラー音楽を嗜好する傾向が強くなり、欧米の音楽スタイルを移入した音楽集団が次々と活動を開始した。彼らは、ヴォーカル、ギター、ベース、キーボード、ドラムで構成され、コード進行に民俗的旋律を折り込む場合もあれば、逆に敢えてインド音楽の要素を完全に排除して活動する場合もあり、二極化の傾向にある。そして重要な特徴は、英語で歌われる点にある。グワハティはアッサム語、ボド語、ベンガル語等、そしてコヒマはナガの異なる少数民族言語で構成された多言語都市である。したがって、どちらも英語が共通の公用語として機能し、それが音楽にも反映されている。

(4) 第四の特徴には、北東部での音楽祭の興隆が指摘できる。長年の分離独立闘争の影響により産業が乏しい地域では、近年、州政府や地方自治体による観光・文化政策の一環として音楽祭が開催される例もある。ナガランド州コヒマの「ホーンビル音楽祭」もその一例であり、主催の州政府と民間企業の協賛による、毎年10日間の野外音楽祭では、伝統芸能とバンド・コンテストが同時開催されている。

(5) 第五の特徴として、インド本土の音楽シーンにおける北東部の若者の活躍が挙げられる。その一例として、日系企業のヤマハがアジア10カ国を対象に開催するアマチュアバンド・コンテスト「アジア・ビート」においては、2011年の国内予選でグワハティのバンドが優勝した。その他、インド本土でのバンド・コンテストの入賞者も、近年は北東部出身者が常連である。以前のインドのポピュラー音楽の文脈では、北東部の音楽文化は本土から疎外された存在であったが、北東部のポピュラー音楽の活発化に伴って、'Northeast'という言葉が単に地理的な意味を超えて、クールな'Northeast'という新たなイメージが形成されつつある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アッサム州グワハティとナガランド州コヒマで開催される音楽祭に焦点を当て、インド北東部の若者の音楽文化が、相次ぐ民族運動や軍事的弾圧、また90年代以降の急激な社会経済的変動の中で、いかに変容してきたかを探ることである。

そして多様な民族的背景をもった若者達が集まる、音楽祭という「空間」を通して、文化的アイデンティティがどのように形成され、音楽やその活動に表象されているか、更には、アイデンティティとコミュニティの繋がりという観点から、同地域での音楽祭がいかに媒介的な機能を含んでいるかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、グローバリゼーションの中で変容する北東部の音楽祭に注目する。北東部の若者の音楽文化の変容を、民族運動やグローバリゼーションという社会、政治、経済的な文脈から考察した上で音楽祭の個々の事例を扱う。そこでの参与観察、音楽家や主催者、聴衆へのインタビュー調査や、歌詞・楽曲・パフォーマンス分析を通して、音楽実践者の文化的アイデンティティがどのように表象されているか、また北東部での音楽祭が持つ役割・機能についても明らかにする。

本研究では、学際的に議論される次の三点のキーワードを問題として捉え、北東部の音楽祭の具体的な事例から検討を行う。

(1) 最初のキーワードは「空間」である。社会学者のルフェーヴルは『空間の生産』の中で、「空間」は社会的に生産されるものであり、政治や経済や文化や意味が生産され実践される領域として空間論を展開した。本研究もこの概念を踏襲し、音楽祭というパフォーマンス「空間」において、政治・経済的意味や文化的意味がどう生産され、時には操作されているのかを分析する。そこでは、実践者や主催者だけでなく、聴衆もまた能動的な生産者として機能する。実践者は聴衆の多様なコンテクストを認識し、同じ時間と空間とグルーブを共有することで「共存性」〔永原 1994〕が生成されていく。本研究では、この繰返しが、共通のコンテクストの生成や新たな文化的アイデンティティの形成に関与していると仮説し、「空間」と「共存性」の観点から音楽祭を検証する。

(2) 第二にはグローバリゼーションという視点が挙げられる。90年代からのその議論では、文化の同質化〔Smith 1990〕や、世界の多様性へ慣れること〔Featherstone 1995〕など多様な解釈が提示されたが、ロバートソンが、多様化と同質化の両過程が絡み合っている〔1995〕と主張して以降、「グローカリゼーション」という言葉が浸透し、グローバル化とローカル化は単一方向の流れでは捉えられなくなった。近年は「環流」〔杉本〕という言葉もその複雑な動きを表す用語

として使用されつつあり、本研究においても、本土や隣国、また欧米在住の北東部出身者と、北東部の音楽文化との相互の繋がりについても視野に入れる。

(3) そしてグローバリゼーションと密接に関わるのが最後のキーワード、アイデンティティである。そこには、自己と他者の表象という普遍的な問題が潜在している。過去20年のインドの経済自由化に伴う経済成長や、メディアの発展は、人・モノ・金・情報といった側面から、急激にローカルな地域と世界との距離を縮めると同時に、自己の存在を俯瞰的に映し出すことにも繋がっている。特に北東部での近年の音楽祭は、北東部の若者のイメージを涵養し、文化的アイデンティティを表現する場でもある。多民族・多言語で構成され、西洋文化とインド文化、そして個々の民族の文化が複雑に絡み合った社会であるからこそ、表現方法の選択性が彼らにはあり、音楽のパフォーマンスでは「戦術」的な表現も必要となる。そして他方、音楽祭は他者から自己を分析・評価され、それを認識せざるを得ない場でもある。彼らの言説から民族や'Northeast'としての帰属意識や、本土との差異に関する意識を緻密に分析する。

本研究では、24年度から27年度にかけて複数回の現地調査を、インド北東部のグワハティとコヒマを中心に実施する。そこでは、出身民族の異なる複数の音楽集団をインフォーマントとし、その音楽活動に密着して緻密な調査を行う。24・25年度の12月には両都市で開催される音楽祭を参与観察し、個々のパフォーマンスの歌詞、旋律、リズム、楽曲様式、歌唱法、使用楽器、また音楽祭という「空間」で実践者と聴衆が生み出すダイナミズムについての分析も行う。また同時に音楽祭の出演者や、主催者である州政府や地方行政、協賛企業、聴衆へのインタビュー調査を基に会話分析にも取り組み、文化的アイデンティティや北東部で音楽祭が持つ機能について考察する。

4. 研究成果

当初の計画では、インド北東部アッサム州グワハティとナガランド州コヒマの2都市において、その音楽文化を比較的に調査する予定であったが、初年度に実際に現地調査を行った結果、ナガランド州の若者の音楽文化そしてその変容について焦点化すべきと判断した。その第一の理由は、その首都コヒマは第二次世界大戦中の通称インパール作戦の激戦地であり、終戦後もインドからの分離独立運動が最も激化した地域である。そうした歴史的背景の中で、口承文化がいかに継承あるいは変容しているかを調査する必要性を強く意識したためである。また第二の理由は、長年にわたって分離独立闘争が続き、独自の地域産業が発展途上の中で、近年、ナガランド州政府が、ナガの少数民族の伝統文化やインド本土とは異なる感性の若者音楽文

化を、観光産業と結び付けた、文化資本として国内外に発信を始めた点である。したがってこうした理由から、コヒマで開催された音楽祭に焦点を絞って研究を進めていった。

具体的には、現在のナガの音楽文化を形成する、部族音楽、教会音楽、ポピュラー音楽を対象に、コヒマ周辺で開催されたナガの若者達が集う3つの音楽祭に焦点化した。そして、2000年代後半以降、増加を続ける音楽祭や音楽コンテストがナガの音楽文化に与えている影響について考察した。以下、調査・分析から明らかになった点は、下記の通りである。

1) 少数民族芸能の観光資源化：少数民族芸能祭からの考察

ナガ社会にとって音楽は生活から切り離せないものであり、各少数民族は仕事歌や子守唄、哭き歌、求愛歌、また首狩りの風習に伴う出草歌等の多種多様な民謡を有し、歌唱形態もポリフォニーの合唱形態で歌われ伝承されてきた。農村では現在も収穫期に合わせて祭りが催される一方、コヒマのような都市文化の中では部族文化は希薄化しつつあった。

そうした中、州政府は2003年より観光振興政策の一環としてコヒマ近郊のキサマ村でホーンビル祭と呼ばれる部族芸能の祭典を12月に催し、州政府公認の主要16部族からそれぞれ一つの村が毎年選ばれる。10周年を迎えた2013年は、政府の公式発表に拠れば18万人超の来場者、2億ルピー超の経済効果があったとされる。参加する村では年配者から若者までが一丸となって開催期間中には毎日異なる芸能を披露し、参加した村人への調査から、少数民族文化の伝承やその活発化の起爆剤として機能していることが明らかとなった。

2) 少数民族コミュニティと教会音楽との繋がり：各民族バプテスト教会対抗の合唱コンテストからの考察

ナガランド州民の9割以上はキリスト教徒で、その最大教派は米系バプテストである。1870年代以降、徐々に浸透していった。1872年に最初に布教を開始したクラーク牧師を初め、宣教師の多くが音楽に精通した人物であったことは、バプテストがナガの地に教会音楽を通して浸透した最大の鍵であると多くのナガが言及する。今日コヒマのような都市においても、各少数民族のバプテスト教会はコミュニティの拠点として機能し、日曜礼拝や賛美歌では各民族の独自言語が使用される。

2011年にはコヒマ・バプテスト青年会主催による合唱コンテストが初開催され、2013年の第2回には市内の11教会が参加した。教会附属の合唱団は同じ民族の若者で構成され、コンテスト開催以降、その音楽レヴェルは急激に進歩し、教会音楽や西洋音楽への

関心が高まっていることがコンテストへの参加者や指導者へのインタビューから明らかになった。

3) ナガランドにおけるロックの興隆と州政府による音楽振興政策の影響：州政府主催ホーンビル国際ロック・コンテストからの考察

ナガ社会ではハリウッド映画音楽の受容が極めて少なく、ケーブルTVを通して多くの若者は欧米のロックに傾倒する傾向にあった。この背景には西洋の教会音楽がナガの音楽的基盤にあることが指摘できる。インターネットや音楽配信メディアの普及からその音楽受容は変容しつつあり、2010年代には視聴者がSMSで投票可能な音楽オーディション番組の流行や、若者の音楽活動の活発化、楽器購買力が高まった。そして西洋クラシックやロックの音楽学校の増加に伴い、英国のトリニティ音楽検定やロック検定等の導入も目立つ。また地元アーティストを支援するe-commerceサイトも開設され、音楽はデータ購入する時代となり、草の根的な音楽産業が芽生え始めている。

音楽的な新しさを模索するバンドも多く、部族音楽の要素をロックやブルースに融合させるものや、近年のK-POPやJ-POPという東アジアの文化コンテンツの流行を受けて、音楽ジャンルも多様化の傾向にある。

州政府内の音楽振興局では、若者への特にポピュラー音楽振興政策として2004年よりロック・コンテストを主催し、2013年は4日間にわたり野外の特設ステージで連夜開催された。携帯電話会社のエアテルが主要スポンサーとなり、優勝賞金は100万ルピーと国内の音楽祭では破格の高額である。国内外の130超の応募数の中から24バンドが選考され、期間中の各25分間のパフォーマンスによって審査される。出場した地元ナガのバンドはSNSを常に更新しながら知名度や支持者を増やし、また演奏やMCではナガ特有の掛声で聴衆との距離感を縮め、「ナガ」であることが強調される。

こうした州政府の音楽振興政策や若者を中心とした音楽熱の高揚に起因して、音楽活動は個人や集団の楽しみから、他者へ見せ聴かせる芸能へと脈絡変換しつつある。ナガ社会での音楽祭は、音楽のレヴェルアップや音楽産業の萌芽を促し、文化的アイデンティティの収斂、コミュニティの結束・拡大においても媒介的な機能を担っている。また音楽祭は他者認識・自己認識の場であると同時に、他人の評価を受ける場でもある。若手ミュージシャンの多くは、第一に西洋音楽が彼らの音楽的基盤にあることに他インド地域との差異を見出し、それをハリウッド文化圏ではない彼らの強みとして強調する。そして第二に、歌唱法や歌唱様式、衣装等によって部族的要素をポピュラー音楽と戦略的に融合させることで、新たな形での部族文化の再生

に繋がっている現象も見られる。若者に向けた州政府のポピュラー音楽振興政策や付随する音楽祭は、インド国内においても先駆的な事象であり、ナガの若者文化の活性化、音楽産業の萌芽、対外的には新たな「ナガ」のイメージ戦略に繋がっているといえる。

こうした研究成果は、学会誌での論文掲載の他、学術映像作品「ナガランド州コヒマの音楽祭：部族文化の再生と若者への音楽振興政策」(約 37 分)として、ウェブ上で一般公開し、調査協力者である多数の現地のインフォーマントに対しても、研究成果をフィードバックしていることも、本研究の特徴である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 岡田 恵美、「少数民族文化の観光資源化と『芸能』としての復興のプロセス：インド北東部ナガランド州ホーンビル祭からの考察」、『民族藝術』、民族藝術学会学会誌、査読有、32 巻、2016、149-155
- ② 岡田 恵美、「ナガランド州コヒマの音楽祭：部族文化の再生と若者への音楽振興政策」、『日本南アジア学会第 27 回全国大会報告要旨集』、日本南アジア学会第 27 回全国大会事務局、査読無、2014、88-89

[学会発表] (計 2 件)

- ① 岡田 恵美、口頭発表「ポップカルチャーとしての部族民謡の再生：インド北東部ナガランド州チャケサン族のポリフォニー《Li》からの考察」、東洋音楽学会第 66 回全国大会、2015 年 11 月 1 日、東京藝術大学 (東京)
- ② 岡田 恵美、学術映像発表「インド・ナガランド州コヒマの音楽祭：部族文化の伝承と若者への音楽振興政策」、日本南アジア学会第 27 回大会、2014 年 9 月 27 日・28 日、大東文化大学 (埼玉)

[その他]

ホームページ等

- ① 学術映像作品「インド・ナガランド州コヒマの音楽祭：部族文化の伝承と若者への音楽振興政策」(約 37 分)
<http://www.youtube.com/watch?v=T31QCL8Kx3U> (WEB 公開中)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 恵美 (OKADA, Emi)
琉球大学・教育学部・講師
研究者番号：60584216